

アミーゴ会だより

2013年 7月
通巻第 15号
季刊 2013-III



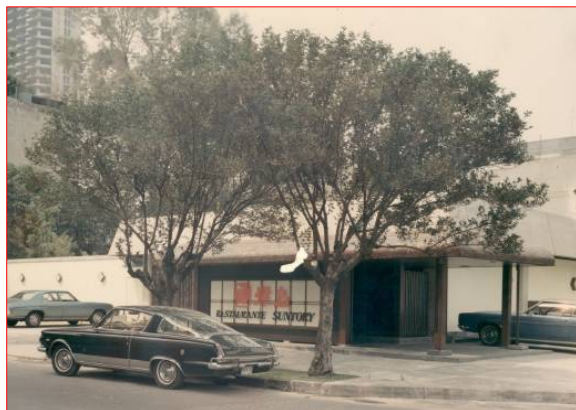
発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
 鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコビジネス事始め

メキシコにおけるレストランサントリーの歴史 ～お客様第一を愚直に支える従業員教育～

サントリーメヒカーナ社長
桜井 文生

サントリーの海外における本格的な事業活動はメキシコから始まった。1962年、メキシコシティにサントリー・デ・メヒコを設立。中産階級の勃興を予期した当時の社長佐治敬三が「この国をトリスウスキーで席卷しよう」と現地生産に乗り出した。しかし、この目論見は惜しくも外れてしまう。それでもなんとかメキシコを橋頭堡に中南米進出を果たしたいと考えていた社長佐治敬三は、ならば急がば回れとばかりに、サントリーの名をメキシコの人々に知ってもらう方策へと転換。1970年にメキシコシティでレストラン事業を開始した。



こうしてレストランサントリー第1号店は誕生した。当時としては市内で最高のロケーションに建てられた本格的な日本建築と内装。手入れの行き届いた日本庭園には、石灯籠や泉水までしつらえられていた。当時、メキシコにいた日本人は4000人不足。それでも、1号店は日がな一日食事をしているメキシコ人に受け入れられ大成功を収める。

レストランサントリーはメキシコでの成功を機に、その後、サンパウロ、ロンドン、パリ、ミラノ、マドリード、シカゴ、アトランタ、ボストン、バンクーバー、ハワイ等、矢継ぎ早に開業した。しかし、社内の事業方針の転換もあり（平たく言うと、儲かっている所はクローズ）、最終的には現地に根付き、地元の人々から強く支持されている（もちろん儲かっている）メキシコとハワイの店だけが残った。

「どうしてメキシコのレストランだけが大きな成功を収めているのか」と、メキシコ在住の日本人の方からよく質問を受ける。「サービスの質の向上に細心の注意をはらっているためです」とお答えしている。つまり、日本のお客様第一主義といったサービスがメキシコ人顧客にも支持されていることが第一の要因である。メキシコ人は食に対しては保守的で、あまり冒険をしない。一度気に入れば、毎月、あるいは毎週でも同じレストランを利用する傾向があり、それが息子、孫の代まで続く。永年のお客様からの信頼による歴史の蓄積が、ブランド確立につながっていると考えられる。



目次

- | | |
|---|------------------------------|
| 1. メキシコビジネス事始め：「サントリーレストランの歴史」 | サントリーメヒカーナ社長 桜井文生... 1 |
| 2. 私の本棚：「現代メキシコを理解するための60章」 | アミーゴ会幹事 河嶋正之... 2 |
| 3. メキシコへの誘い：「アカプルコと読書 2013年版」 | Tabi Tabi TOYO 発行人 松枝勝利... 3 |
| 4. 私とメキシコ：「黒沼ユリ子 50周年記念コンサート」 | オフィス・アミーチ代表 西松朝男... 5 |
| 5. 催事報告：シンコ・デ・マヨ◇催事案内：アレグリア・デ・メヒコ/フィエスタメヒカーナ◇あとがき | ... 7 |
| 6. メキシコへの誘い：「2012年メキシコ周遊“ブス”旅行 その2」 | 海外旅行作家 京免宣昭 ... 8~14 |

そのサービスの質の向上をはかるために必要なものは、従業員教育システムである。まずはレストラン全従業員（850人）に会社方針を説明、各人が役割目標を設定する。その後、各部署の上司と擦り合わせ、個人の最終目標が確定される。同システムを開始してすでに12年が経つが、当初は目標のレベルがバラバラで（スポーツカーを買う、家を買う、綺麗な彼女をつくる等）会社の思惑と異なった目標設定ばかりで、調整に多くの時間を要した。最近では個人目標も会社目標に合致する形で設定されるようになったものの、優等生的な内容が多く、PDCA（Plan-Do-Check-Action）が確実に回っているかどうかの確認が非常に難しい。ここでもメキシコ人従業員のしたたかさに振り回されて、何度も挫折を味わいながらも、サービスの質の向上、そのための従業員教育を愚直に継続させている。

試行錯誤を続けながら、メキシコでのレストラン

ビジネスは43年が経過した。現在、SUNTORYブランドで5店、Shuブランド（高級和風フュージョン）で2店、メキシコシティ、アカプルコ、グアダハラハラの3都市に展開している。



今後も日本の文化、日本の食、日本のきめ細かいサービスを提供し続けることで、100年後もメキシコの皆さんに支持されるレストランでありたい。

（了）

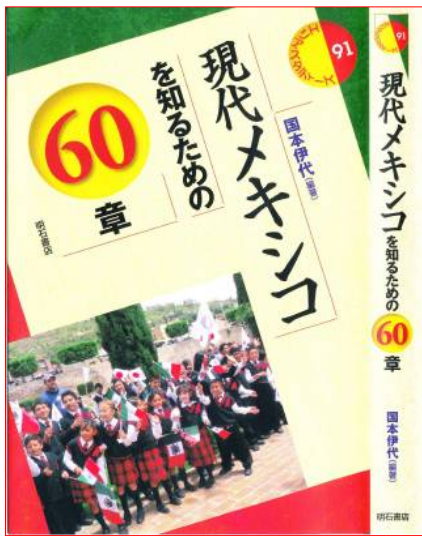
【編集部：前ページ左上写真は1970年開業時／全て桜井氏提供】

私の本棚

『現代メキシコを知るための60章』

国本 伊代 編著 明石書店 2011年7月刊 300頁 2000円＋税

アミーゴ会幹事 河嶋 正之



本書は現代メキシコの総合情報ガイドとして、3年の歳月を経て刊行された。「21世紀初頭のメキシコの姿を日本の読者に多面的に紹介し、日本とメキシコの相互理解を深める」との趣意のもと、現代メキシコの政治、経済、社会、文化、日墨関係などの分野で、「今何が起きているか」を専門家9名が現地滞在と取材に基づいて分担執筆している。

第1部「独立200年・革命100年のメキシコの姿」では近年の経済体制の変化と国づくりの課題、第2部「革命政党 統治71年と多頭政治の時代」では2000年の政権交代への軌跡と政治文化、第3部「資源大国の経済運営」では石油国と農業政策の課題、第4部「メキシコの国際ビジネス環境」では市場開放と企業文化、第5部「国際政治とメキシコ外交」では外交原理と対米政策、第6部「壁で分断されるアメリカとメキシコ」では越境移民と米墨の社会、第7部「環境問題と都市化の縮図としてのメキシコ市」では大気汚染改善や貧困社会、第8部「21世紀のメキシコ社会」では家族の変容や先住民・若者の状況、第9部「魅惑の文化大国メキシコの姿」では伝統文化や大衆文化、第10部「21世紀の日本とメキシコの関係」では交換留

学制度や日墨学院(リセオ)、学术交流などに焦点を当てて、現代メキシコの現状を簡潔に解説している。

また、各部末にはコラム形式で興味深いテーマが解説されており、現代メキシコのありようをより深く理解できる読み物となっている。

紹介者も第4部第24章「日本企業の輸出向け生産戦略」で、日本企業の対墨投資の現状と展望および基本戦略(テレビ・自動車・インフラ・航空機)を概説している。

周知のように、日本企業は近年、自動車分野(完成車・部品)を中心にメキシコでの活発な事業展開を進めており、日本の2012年対墨投資額は前年比85%増の17億ドル(墨経済省調べ)と急増、国別投資額は米国に次ぐ第2位となった。進出企業総数も在米日系企業の投資案件をも含めて、今や600社を超える勢いだ(12年10月時点で約550社：在墨日本大使館調べ)。他方、本書は13年春の出版後約1.5年で第2刷が増刷された。出版社によれば当該エリアスタディーズ・シリーズの増刷期間は通常2年余とのことで、日本社会と日本企業のメキシコへの関心の高まりによるものと歓迎したい。

なお、類書に既刊の『メキシコを知るための60章』(吉田栄人編著 明石書店 2005年2月)がある。同書は「今日世界に流布するメキシコ・イメージが形成されるに至った歴史的背景について、民俗舞踊を代表とするフォークロア(メキシコの民俗文化)の誕生に注目して紹介する」とあるように、メキシコの民族、歴史、文化などに関する基礎的な情報紹介を主な内容とする。また、『メキシコ経済の基礎知識』(中畑貴雄著 ジェトロ 2010年3月)は、メキシコでのビジネスに直結する事業環境や制度情報を詳細に解説している。併せてご一読をお勧めしたい。

<了>

アカプルコと読書 2013年版

～書を携えてアカプルコに出かけよう～

[編集部注：今年は仙台藩の支倉常長が慶長遣欧使節団を率いて日本を出発して丁度 400 年にあたります。使節団が三か月後に最初に辿り着いた港はアカプルコ。最近はカンクンの方が知名度が上がった様ですが、松枝氏から往年のアカプルコの良さを改めて思い起こさせる原稿をメキシコからお送り頂きました。さらに文中で紹介の書籍を読んで、この暑さを吹き飛ばすのも一興と思われれます。思い出とともに楽しみください]

メキシコ無料情報誌 Tabi Tabi TOYO 発行人 松枝 勝利

アカプルコに到着すると、昼夜を問わず漠然とした高揚感が膨らんでくる。攻撃的な熱気や目に眩しい輝く太陽は相変わらずだ。タクシー運転手に天候について尋ねると、「太陽のないアカプルコは、アカプルコではありません」と約束通りの返答。このフレーズを聞きたい為に、毎回同じ質問をしてしまう。変わらないことが心地よいのだ。十数年通い続けるアカプルコでの私の過ごし方や持ち物も、いつの間にか定型化し変わることがなくなった。数冊の本は必需品である。



↑コンデッサ・ビーチ

猛暑の戸外から逃避し、心地よく冷房の効いたミゲル・アレマン通りを望む窓際の席や、椰子の木陰のテラスに陣取り、冷凍され白く曇ったグラスにパシフィコ・ビールを注ぐ・・・アカプルコの至福を感じるひととき。一息ついたらおもむろに本を開く。

遠藤周著作『侍』。400年前の慶長遣欧使節正使、支倉六右衛門常長の物語。62万石の大藩から当時飛ぶ鳥を落とす勢いのエスパーニャへの使者としては分不相応とも映る、600石取りの下級藩士である支倉が、日本でのキリスト教布教を画策するソテロ神父の策略と不本意な藩命に翻弄される純朴で愚直な田舎侍として描写され、「支倉が使者に選ばれた理由」が私の中で最大の関心事となっていく。400年後の現在、アカプルコの海岸通りに面したPLAZA JAPON に立つ支倉像に問うたところで、答えは椰子を揺らす風に吹かれるばかりであろう。

カレティージャ・ビーチの健康的な喧騒から逃れ、海賊の洞窟のように薄暗いマリナ・クラブへ。目が暗順応



↑マリナ・クラブ
ロケタ島↓

かつての常宿ボカ・チカが、高級ブティックホテルとして再オープンした後も、相変わらず静かで穏やかな

気配に満ちた空間。ちらし寿司の体裁と値段は随分と変わってしまったけれど・・・。アカプルコ湾の海底にはアルゼンチンの沈没船が、ロケタ島の先端には聖母マリアが、海底の静寂の中、魚類の棲家としてひっそりと鎮座する。横切るバナナボートが天真爛漫な歓声と小さな白い航跡を残すのを一瞥しつつ、持参の文庫本に手を伸ばす。



城山三郎著『望郷のとき 侍・イン・メキシコ』。慶長18年、支倉常長を団長とする仙台藩士百余名。藩命大事の侍という立場を前提に、キリシタン禁止令と鎖国という予期せぬ運命に翻弄され、望郷の念にかられながら、支倉のローマからの帰還を待つだけのアカプルコでの日々は、空虚で切ない時間の浪費だった。ヌエバ・エスパーニャ時代のメキシコの風俗が生き活きと描写されるだけに、言葉、習慣、価値観、何もかもが異なる侍たちの孤独と郷愁が重く伝わってくる。侍たちと異なり、自らの意思で現代のメヒコで生活している私には、アカプルコでの時間の浪費は、ブドウ糖の点滴にも等しく、私のココロとカラダを元気にさせてくれるというのに・・・。

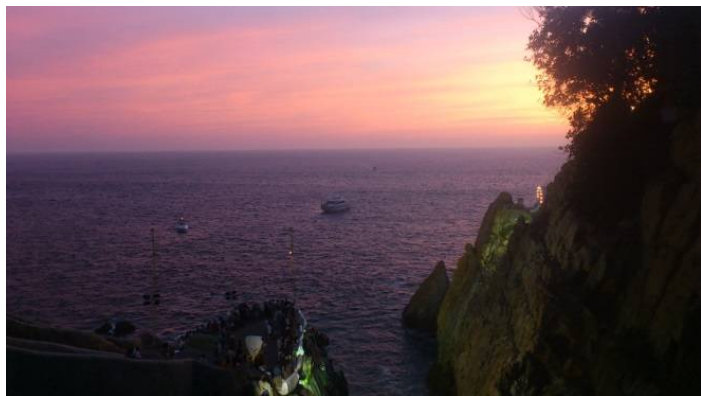
ケブラダ付近の海岸線の坂道を下りきると、新鮮な魚貝を供する海の家が数軒。海からの微風に紛れたアヒージョの香りが食欲を刺激する。賽の目にスライスされた



サザエやカラコル・チーナと呼ばれる貝は、レモンを絞ると嫌々をするように最後の抵抗を試みる。

←カラコル・チナ

ここからはディエゴ・リベラがドローレス・オルメドの為に残した壁画も近い。日没までのけだるい午後をホテル・フラミンゴの断崖絶壁のテラスで本を片手に過ごす。かつてはここから見えるアカプルコ最高のサンセット



↑ケブラダの夕景

トが近づくと、アメリカ人に場所を占拠されてしまったものだ。ミチェラダのグラスに付着した氷は見る間に融けていく。

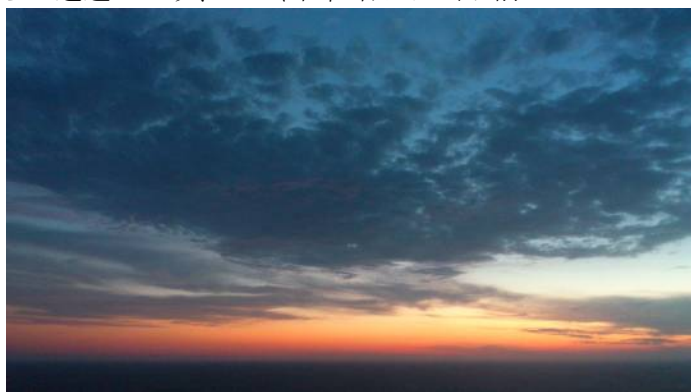
『薔薇のつぼみ・宰相山本権兵衛の孫娘』村松友視著。愛人と噂されたフィデル・カストロよりも早く逝去されたが、波乱に満ちた生涯の晩年をアカプルコで過ごした日本人女性、故山本満喜子女史の半生を追うドキュメント小説。敬愛するガイドS氏が著者取材の為にアカプルコへ連れて行くのだ。賛否両論あろうが、この女性の存在は私にとってはヨーコ・オノの比ではない。ジョン・レノンは音楽史上の大人物だが、山本女史は近代世界史、東西冷戦構造のキーパーソンとも言えるフィデルに愛されたのだ。日本人女性のバイタリティと国際的評価は過去も現代も瞠目に値する。

マンサニージョの「魔法」という店の大窓から眺める淋しげでうらぶれた夜のコンテナ港や、湘南海岸 134号線を思わせるマサトランも悪くない。しかし、メキシコの全ビーチ・リゾートの何処よりも、アカプルコの夜景は別格と思う。

ゴルゴ 13 第 41 巻収録『アカプルコ散華の夜』。小娘の娼婦だったメアリー。かつて一夜を共にしたゴルゴに教えられたブラディ・メアリーを忘れ得ず、美しい大富豪婦人となってゴルゴの前に再び現れるという作品は、アカプルコの夜景と花火がポイントになっていた。船戸与一原作の割にクオリティの低い内容だが、「俺に昔話をする趣味はない・・・」というゴルゴの名台詞が登場した。

ノーベル文学賞に最も近いと言われる村上春樹の『辺境、近境』に、2週間程メキシコを陸路で旅した紀行文がある。さりげなく鋭い洞察に富んだ感心させられる作品だが、アカプルコの印象については、「古い映画の中で見たものが存在する、それ以上の感動もそれ以下の失望もない」とか、「錆びていだけ…」というネガティブな表現に終始している。

アカプルコは本当に観光地としての実力がないのだろうか？ 否。これは旅のスタイルに左右される問題であり、自分の経験から想像するに、アカプルコの空気を濃密で甘美なものとするのは、メキシコシティの混沌からの逃避という、シティ在住者には当り前のプロセスこ



↑太平洋の夕暮れ

そが、独特の開放感の要因となっているに違いなく、「一度や二度でアカプルコを語るんじゃないよ」・・・との諸先輩方の呟きが聞こえてきそうである。

かつて寺山修司は「書を捨てよ、町へ出よう」という刺激的な論評を著した。メキシコ生活 20 年をようやく迎えた万年青二才の私は、「書を携え、旅へ出よう」を励行し、慶長遣欧使節が 400 年前に目指したアカプルコに、これからも通い続けてしまうのだろう。



午前中はプールサイドで、午後は冷房の効いたホテルの部屋で読書三昧。夜になってようやく「赤獅子」や「狐」に出かけるだけの休日でも、疲弊した肉体を弛緩させ、鈍化した精神をリチャージするには事足りるのだから・・・。

<2013 年 6 月 27 日記>

[著者注：文中の書籍は書店或いはアマゾンで購入可能です]
 遠藤周作著 『侍』 新潮文庫
 城山三郎著 『望郷の時』 文春文庫
 村松友視著 『薔薇のつぼみ』 集英社文庫
 さいとうたかお作 『ゴルゴ 13』 小学館単行本 41 巻/文庫本 1

感動の嵐に包まれたメキシコの夜 ～黒沼ユリ子ゴールドデン・アニバーサリー・コンサート～

オフィス・アミーチ代表 西松 朝男

[編集部注：黒沼俊子会員より、メキシコ市で去る3月23日開催された黒沼ユリ子50周年記念コンサート“ANIVERSARIO DE ORO”の様子を寄せていただきました。臨場感あふれるレポートの執筆者はコンサートのビデオ撮影のために往墨したオフィス・アミーチ代表の西松朝男氏、写真撮影はメキシコ在住写真家はぎのみほ氏です。小見出しは編集部の勝手付記にて乞ご了承]

祝50年：Aniversario de Oro

まず、総白大理石の堂々たる会場の国立芸術宮殿の前に立って、我が眼を疑う思いにかられた。初めてやって来たメキシコ・シティーは、なんとなく日本で無意識のうちに植えつけられていた“赤茶けた大地とサボテン”の風景とは似ても似つかぬヨーロッパ風の大都会で、この美術館とオペラハウスが同居する芸術宮殿の歴史を刻んだ大理石の色あいに、この国が決して芸術をおろそかにせず、19世紀から欧米の著名音楽家を招聘したり、同時にメキシコの演奏家たちがニューヨークやパリなどで大成功を博していたと伝え聞く歴史に合点。

この館内でのみ観ることが可能な、メキシコの世界的に著名な壁画家たち、リベラ、オロスコ、シケイロス、タマヨなどの大作に圧倒されながら、黒沼ユリ子への祝賀コンサート会場に入る。メキシコが誇る作曲家マヌエル・マリア・ボンセの名を冠したボンセ・ホールと言う。こじんまりしたリサイタル・ホール風だが、そこでこの夜、満席の聴衆と共に、実にユニークなコンサートが開かれたのだ。前売り券は完売。当日売りを期待してやって来た聴衆は、泣く泣く会場をあとにしていた。

去る3月23日夜、50年の長きにわたって“音楽を通じてメキシコと日本の交流を深め促進させた貢献”に対して、黒沼ユリ子に捧げる祝賀コンサートがメキシコを代表する豪華ソリスト総出演で華やかに、また心温まる感動的な雰囲気の中で開かれたのだ。それは結婚50年を祝う金婚式にちなんでゴールドデン・アニバーサリーと名付けられていた。

た9時間にわたる「東日本大震災・被災者連帯」マラソン・コンサートに出演したソリストたち、室内楽団、合唱団、オーケストラなどを紹介する映像と、黒沼ユリ子の日本での最近の活動についてのテレビニュースの抜粋などがビデオで紹介された後、黒沼ユリ子は、ユーモアも交えた挨拶をし、拍手喝采されていた。私にはスペイン語が理解できなくて、非常に残念だったが…。

コンサートは、メキシコ近代音楽の父とも呼ばれている作曲家マヌエル・マリア・ボンセに敬意を表して、黒沼ユリ子トリオが彼のピアノトリオから「アンダンテ・ロマンティック」を演奏してスタート。続いて5年前に彼女が音楽監督をつとめて日本でも公演し、大成功を博した4人の歌手たちが、団伊玖磨のオペラ「夕鶴」の抜粋



を衣装もつけて登場して披露。見事な日本語（スペイン語のスーパー付

き）と感情豊かな演技で熱演し、聴衆から「ブラーゴ！」が飛び交う。

このコンサートは黒沼ユリ子の司会進行で続いて行く。今年没後100年を記念するメキシコの作曲家エロルドウイのマズルカをヨゼフ・オレホフスキがショパンの香りを醸し出しながらピアノ独奏後、日本にもすでに大勢のファンを持つ黒沼ユリ子の愛弟子ヴァイオリニスト、アドリアン・ユストゥスとオレホフスキによってラベルの「ツイガーヌ」が情熱的に演奏され、聴衆を圧倒。休憩をはさんでメキシコが世界に誇る打楽器アンサンブル「タンブッコ」が、コロンビア生まれでメキシコに帰化した作曲家ノボアの「サーベ・コモ・エス？何だか分かる？」を、あたかも弦楽四重奏のように坐って木片をたたいたり、こすったりしながら一瞬の狂いもなく、しかも楽しげに演奏して聴衆の眼と耳を奪って大喝采を受ける。続いてアカペラ六重唱団「ボス・エン・プント」が登場。人気絶頂の彼らはファンが多く、何を歌っても常に大成功を博しているそうだが、この晩は3曲目に何と中村八大の「上を向いて歩こう」を日本語で、しかもリーダーのホセ・ガルバンの新鮮味あふれるシャレたアレンジで歌って会場の全ての人を幸せにして魅了。そしてラストに黒沼ユリ子とアドリアン・ユストゥスが

COORDINACIÓN NACIONAL DE MÚSICA Y ÓPERA
MÚSICA DE CÁMARA

YURIKO KURONUMA
ANIVERSARIO DE ORO

Cinco décadas uniendo los lazos de amistad entre México y Japón a través de la música

Con la participación de
Yuriko Kuronuma, violín
Bozena Slawinska, violonchelo
Józef Olechowski, piano
Encarnación Vázquez, soprano
Ángel Ruz, tenor
José Cerón, barítono
Daniel Cervantes, bajo
James Demster, dirección y piano
Adrián Justus, violín
Tambuco, ensamble de percusiones de México
Voz en Punto

Obras de Ponce, I. Dan. Elorduy, Novoa, García Céspedes, Velázquez, Nakamura y De Sarasate

Sábado 23, 18 horas

Sala Manuel M. Ponce, Palacio de Bellas Artes
Av. Juárez y Eje Central Lázaro Cárdenas
Centro Histórico

Boletos en taquilla
(50% de descuento con credencial vigente a maestros, estudiantes y personas de la tercera edad)

CONACULTA
Secretaría de Cultura

www.bellasartes.gob.mx

多彩な出演者

コンサートはまず、目賀田周一郎・駐メキシコ日本大使の黒沼ユリ子の偉業を称える祝辞に始まり、メキシコ文化芸術庁、国際交流基金の代表者らからの賛辞にボタンタッチ。丁度2年前に黒沼ユリ子を中心となって開い



笑顔で登場し、疑いもなく息の合った師弟によるヴァイオリン二重奏がオレ

ホフスキのピアノ伴奏で演奏された。

聴衆からのスタンディング・オベーションによる熱烈な長い拍手が続いたため、出演者全員がステージに再登場。黒沼ユリ子と抱擁を交わしながら、彼らは満面に笑みを浮かべて彼女に拍手を贈り続けるのを見て、私も感無量となった。果てしなく続くように見えたためか、ついに彼女はマイクを手に拍手を制し、頭を下げた。「この50年間、こんなに幸せな時が来るなどとは夢にも思ったことはありませんでした。ただただメキシコの素晴らしい音楽家の友人たちと、ここにお集まり下さった皆様、そして今後の私の人生で決して忘れることのできない素晴らしいコンサートの機会を作って下さったメキシコ文化芸術庁と日本の国際交流基金に心から感謝します」と、その時、私には理解できなかったが、彼女はスペイン語でそう語ったようだ。



コンサートの終了後には芸術宮殿の2階テラスでカクテル・パーティーがあり、ワイングラスを片手に、箸で上手に巻き寿司をつまんで美味しそうに頬ばるメキシコ人たちに囲まれ、私は一瞬今、自分は何処に居るのだろうか、と不思議な気持ちになった。日本はすでにメキシコからそう「遠い国」ではなくなっていたのだから…。

50年を共有

「国際文化交流と一言でいってもなかなか容易ではありませんよ。ともすると一方的な日本文化の紹介に終わってしまうことも少なくありませんからねえ。そういう意味では今夜のコンサートは理想的なものでしたよ。それもこれも黒沼先生が長きにわたって精力的に培っていらしたメキシコの音楽家との交流のおかげですね。さすがです！」とは、国際交流基金メキシコ事務所長の洲崎氏の弁。

「黒沼先生のメキシコと日本での半世紀に渡る多才なご活躍の歴史に感動しました。それから観衆を魅惑さ

せる音のハーモニー。その音がヴァイオリンから出るのはではなく先生ご自身から出ている妙技に、涙が出てしまいました」と聴衆の一人の日本婦人。

「外務省のある大使と隣の席で一緒でしたが『プログラムが素晴らしく、それぞれのアーティストの演奏も本当に素晴らしかったし、マエストラ・ユリコの話はユーモアがあって、楽しいコンサートでした』とおっしゃってお帰りになりました。私も同感で、これほど楽しめたコンサートは滅多にありません。先生が50年間積み上げていらした日墨の友好の絆が一晩のコンサートに凝縮されていましたね。まさに先生は日本とメキシコの音楽を通しての懸け橋とあらためて実感しました」とは、目賀田大使夫人からの言葉。



<目賀田大使ご夫妻と>

「素晴らしい演奏に、心が洗われる様で涙が止まりませんでした。音楽がどれだけ人々の魂を揺さぶる力があるかという事を、あらためて思い知らされましたよ」とは若い日本人女性。

私は日本の方々とはしか会話ができなかったが、メキシコ人たちの笑顔から、誰もが同じように黒沼ユリ子の功績を疑いもなく認めていることは、スペイン語が苦手の私にも確実に伝わって来たパーティーだった。

ひと言で「50年」と言うのは簡単だが、その日々がどんなに喜ばしかったり、苦悩に満ちたものだったりしたかは、われわれ他人には想像もつかないことだ。が、この日のコンサートに同席できたお陰で、私にはメキシコでの黒沼ユリ子が、いかに多くの音楽家や聴衆から愛され、尊敬されているかを手にとるように納得できたので、日本人として、これほど誇らしいことはなかった。遠路はるばるだったが、実際に現地まで足を運んで来て同席でき、本当に良かったと実感した次第である。

なお、このコンサートについてはメキシコの有力紙「レフォルマ」「ラ・ホルナーダ」「ミレニオ」などが黒沼ユリ子とのインタビューを大きな記事にまとめて掲載していたり、コンサートの翌日には「テレビサ」のニュースでも報道されたり、来週には「教育ラジオ（ラディオ・エドゥカシオン）」局から実況録音が放送されるとのこと。そして彼女には、今後もいくつかのラジオ局からインタビューの生番組に出演依頼が舞い込んでいくと耳にしている。一人の日本のヴァイオリニストがこれほど外国でニュースになることを、私はこれまで聞いたことがないが、これは稀有なことではないのだろうか…。それが偽りのない実感である。

<了>

第1回 Cinco de Mayo Japan Festival 2013 を開催して

有限会社エバーラスティング(Everlasting Co., Ltd.)取締役社長 蔵野 佳好子

Cinco de Mayo(5月5日)なのに、開催日は5月3日～4日だったこのフェスティバル。本当は5日まで会場を押さえたかったのだが、日本では子供の日ということで、どうしても代々木公園側からOKがもらえなかった。

この計画がスタートしたのは、2年前の夏。主催者となった Steven Kim 氏から「シンコ・デ・マヨというアメリカで行われているすごいイベントをご存知ですか？」と聞かれたことに始まる。



海外のことに無知な私は、メキシコとフランスの戦い「プエブラの会戦」から調べることになる。ちょうど、アミーゴ会の講演会でこの辺りの歴史の話聞いたところで、色々な歴史的事象が私の中でつながった。この戦いの戦勝記念日がシンコ・デ・マヨで、メキシコ系アメリカ人たちの中でも大切なお祭りの日となっている。現在ではアメリカ大統領がこの記念日にスピーチをする程までにアメリカにとっても重要なフェスティバルである。

Steven さんはアメリカ人。「日本ではアメリカをテーマにしたイベントがすごく少ないので、アメリカ人たちが楽しみにできるイベントを作りたい」こんな彼の思いを聞いて、手伝うことを決めた。イベントには、ロジックはもちろん重要だが、この開催する側の人たちの思いがなければどんなイベントをやっても同じになってしまう。昨今日本では、毎年やっているからということで、この“思い”がなく、惰性で続けているイベントも数多い。私はイベント会社をやっているが、この主催者の思いがあるかないかで、どれだけイベントの精彩に影響するかはよくわかっているつもりだ。

とにかくこの Steven さんの“思い”があれば、このイベントは成功すると確信した私は、とにかく実務的なことを進めて行くお手伝いを始める。アレグリア・デ・メヒコを主催している私には第一回目を立ち上げることが、どんなに大変かは肌で感じてわかっている。当初2012年の5月にやりたいということだったが、話し合った末、1年待っても、代々木公園が押さえられるのを待とうということになった。それから1年間、Steven さんのフットワークには目を見張るものがあった。どんな方とも、とにかく会って話をし、とことんイベントの趣旨について説明する。こうして支持者を少しずつ増やしていった。しかし、第一回目ということで、成功を信じない方も数多くいた。今年は様子を見てという方も大半だった。

正直開催直前の3月時点では、まだ「大丈夫なのか」という状態であったが、その時も Steven さんの信念は揺らいでいなかった。その彼の信念に支えられ、当日までにやれることはどんな小さなことでもやろうと進んでいくうちに、4月も半ばを過ぎた。



その彼の信念に支えられ、当日までにやれることはどんな小さなことでもやろうと進んでいくうちに、4月も半ばを過ぎた。

この頃から Facebook のアクセス数が急激に伸び出した。結果、直前のアクセスは1万人近くにのぼった。

そして当日。天気も良く続々と来場者が増えていく。期待を大きく上回り会場いっぱい人が埋め尽くした。本当に予想以上である。これだけの人がこのイベントを楽しみに来てくれたのは本当に嬉しい限りである。

出店は全部で46ブース、うち飲食ブースは31。どのお店も30分待ちとなり来場者の方にはご迷惑をおかけしましたが、代々木公園関係者も驚く程の盛況ぶりだったので、ご容赦願いたい。来年は今回の反省点を改善してもっと良いイベントとなるように主催者・関係者一同意気込んでおります。



今回はあえて準備のことを書きましたので、内容をご覧になりたい方は、プロモビデオもアップされている下記 URL をクリック願います。

⇒ <https://www.facebook.com/cincomayojapan>

さて、次はいよいよアレグリア・デ・メヒコの季節。今年の夏はかなり暑そうのでビールがよく売れそう(笑)。アミーゴ会のブースも会場内に設置されますので、会員の皆様どうぞご来場下さい！開催は8月10～12日、場所は横浜赤レンガ倉庫です。 <了>

催事の案内

今年の夏も *iViva México!*

アレグリア・デ・メヒコ 横浜 2013

Alegría de México Yokohama 2013

日時：8月10日(土) 12:00～21:00

8月11日(日) 11:00～19:00

会場：横浜赤レンガ倉庫前広場

入場無料

URL：www.alegriademexico.com



フィエスタ・メヒカーナ 2013 in お台場

Fiesta Mexicana 2013 in odaiba Tokyo

日時：9月14～16日 11:00～19:00

会場：お台場ウエストプロムナード

入場無料

URL：http://www.fiestamexicana-tokyo.com/modules/info/index.php?content_id=1



あとがき：猛暑お見舞い申し上げます。通巻第15号をお届けします。ご覧のように今号も内容盛りだくさんです。読み応えある玉稿を多数頂戴し、編集部は嬉しい悲鳴とともに漸く発行に漕ぎ着けました。今夏もアミーゴ会が後援・協力する「真夏のメキシコ祭典」が開催されます。第17回フィエスタ・メヒカーナ大阪(9月21～23日@新梅田シティ・ワンダースクエア)と併せ、皆様お誘い合わせのうえお楽しみ下さい。酷暑もこれからが本番。会員諸氏のますますのご壮健を祈念します。[か 20130712]

“ひとり弥次喜多ブス旅行”

～2012年メキシコ周遊紀行・その2～

海外旅行作家 京免 宣昭

【編集部注：海外旅行業界 OB の京免宣昭(きょうめん・のりあき)さんより、1 ヶ月に及ぶメキシコのバス(bus=スペイン語でブス)による周遊紀行を石井あけみ幹事の紹介でお寄せいただきました。筆者は現在、NPO 法人シニア大樂の専任講師として「安心の海外旅行」と「世界遺産への旅」を講じて活躍中です。ご寄稿文を数回に分けて連載します。なお、筆者のご了解を得て、編集部が見出しを付し、名所旧跡の説明を旅行ガイドに譲るなど玉稿を圧縮し、筆者の「メキシコとの出会い」を主内容とする勝手編集を施しました】

目次

- 3月29日 成田発～アトランタ経由メキシコシティ着(航空機)
 4月02日 メキシコシティ～ボサリカ往復(バス)
 <ここまで第14号/2013年4月号に掲載済み>
 4月04日 メキシコシティ～モレーリア(バス)
 4月05日 モレーリア～グアナファト(バス)
 4月06日 グアナファト～サンミゲル・デ・アジェンデ(バス)
 4月07日 サンミゲル・デ・アジェンデ～ケレタロ
 ～メキシコシティ経由クエルナバカ(バス)
 4月10日 クエルナバカ
 ～メキシコシティ経由オアハカ(バス/航空機)
 4月14日 オアハカ～プエブラ(バス)
 <ここまで第15号/2013年7月号掲載。以下次号へ>
 4月16日 プエブラ～ベラクルス(バス)
 4月16日 ベラクルス～トラコタル往復(バス)
 4月18日 ベラクルス～ビジャエルモッサ(航空機)
 4月20日 ビジャエルモッサ～カンペチェ(バス)
 4月23日 カンペチェ～ウシュマル～メリダ(バス)
 4月24日 メリダ～チチェン・イツァ往復(バス)
 4月26日 メリダ～カンクン(バス)
 4月27日 カンクン～トゥルム往復(バス)
 4月29日 カンクン～アトランタ経由～4月30日成田着(航空機)

モレーリア

4月4日(水)：バスの出発は早朝6時のためタクシーを4時40分に手配し出発。今回は西部バスターミナルからで、モレーリア等シティの西方都市へのバスが発着している。メキシコには多くのバス会社があり、ノルテとは異なるバス会社が運行している。当バスターミナルで、モレーリアから次の予定地グアナファト行きのバスチケットを希望通り購入することが出来た。出発時間になりチェックインすると前回と同様、水ボトルとパンが支給され早朝でもあり有難く食した。途中、バスのトイレを使用する機会があったが、全く航空機と同様のシステムで予想以上に清潔且つ快適であった。

約4時間でモレーリアへ到着。到着後、タクシー乗り場へ行くとタクシーチケットを買うように指示され、一旦戻り購入後、行く先のホテルを知らせて乗車する。順番のタクシーだったので乗ったが、受け答え等が余り好意的ではなく且つホテルの場所も良く知らないような感じがする。案の定、目一杯飛ばすは、ブレーキ操作は乱暴等で、失敗したと思ったが後の祭り。その上、ホテルの場所が分からず右往左往しながら、別のタクシーに聞いて行ってもダメ。流石に You have to ask Oil Station!! と強引に指示して、ガソリンスタンドに車を寄せて聞いて初めて分かったようだ。20分あれば確実に到着するはずが40分かかってしまった。チケット制度により費用負担の追加はないものの、複雑な気分はぬぐえなかった。

到着したホテルは、カテドラルの直ぐ傍と云っても過言ではない場所に位置している。気分を戻してホテルへ

チェックイン、地図をもらって説明を受ける。ホテルは、三ツ星だが、大型のダブルベッド、シャワー室、洗面所、トイレも清潔でOKだ。モレーリアの街並みは、スペインの街と全く変わらない様相で、通行している人間の顔、肌色、目の色と髪の毛が異なっているだけである。

明日は、念願のグアナファトへ出発だ。

グアナファト

4月5日(木)：モレーリアからグアナファトへのバス直行便の頻度が少なく、予約を取っておいて良かった。出発時間は9時20分、久々にゆったりとした気分で朝食を取ることが出来た。また、モレーリアにはメキシコ独立の先達者ミゲル・イダルゴ神父がいたことを再認識させられた。タクシーでモレーリアのバスターミナルに向かう。到着日のようなことはなかった。バスは定刻発車。例のごとく、水ボトルとパンセットが支給される。尚、未だシティとモレーリアのホテル滞在のみであるが、ホテル内には水ボトルが2本用意されており、別途自分でお茶を飲む際には必ず2リットルボトルを購入している。いずれにしても、見学に出掛ける際ホテルのボトルを持参することが出来有難かった。

定刻より少し早い12時過ぎ、グアナファトのターミナルに着く。ここで、明日のサンミゲル・デ・アジェンデと明後日のケレタロ&クエルナバカ行きのバスチケットを購入するため、当該バスカウンターに行くと、サンミゲル行きの当初の希望便は満席で、次の便にする。やはり、多くの人が利用していることに今更ながら気がつく。その後、タクシー乗り場に行き、ホテルに向かう。

ドライバーはとても陽気で日本語で「コンニチワ」と話しかけて来る。長いトンネルに差し掛かると、これは昔の銀山坑道であった所で、今は迂回道路、保管庫等として利用されていると云う。但し、なるべく行かないように注意をされる。何故なら、迷路のようになっており、危険な目に会うこともあるからと強く云われた。20分もかからずホテルに着く。銀鉱山跡地らしくグアナファトの街は坂が多く、その景観は色彩豊かで何故か胸が昂揚する感じがする。

ホテルの婦人マネージャーも、女主人らしくきびきびとした対応でとても気持ちが良い。丁度、レストランの改装が終わったばかりで新しく、美味しいはずよとまで言われ、期待したい。それが現実だった。このことは後ほど。街のマップの説明を受け、見学の道順までとても的確である。ランチの後、早速、見学に出発。街に出ると、木曜日にも関わらず通行人の多さに驚いた。キリスト関連の聖祭のせいであろうか。

人混みのなか主な見学地は終了し、今からショッピングに出掛ける。それは家族から銀のヘッドやピアスがあ

つたら買って来るようにとの厳命を受けていたからで、ここが本場でもありトライしてみる。結論から云うと、かなり気に入ったものがあり、満足。今夜はグアナファトで美味しい夕食を取ろうと思いガイドブックを読み直す。「ロづけの小道」とイダルゴ市場間の、ラ・カレータという鶏肉を焼いている店に入ることにする。結構大きい鶏肉の塊、野菜とトルティーヤ等がセットで、鶏肉を食べるのに大奮闘したが三分の一は残してしまい、ゴメンナサイである。

サンミゲル・デ・アジェンデ

4月6日(金)：今日は、サンミゲル・デ・アジェンデへ出発だ。日本のメキシコ観光局の人から、是非サンミゲルを尋ねてほしいと云われた場所であり、期待しよう。ブスの出発が10時半のため、結構ゆっくりと朝食を取ることが出来るが、女主人の云ったレストランに行くと驚く。3つ星のホテルだが、朝食メニューは5つ星と云っても過言ではないほど充実している。メニュー、種類が豊富且つ並べ方までお気に入り。当ホテルの朝食は、今回の旅行のハイライトの一つである。タクシーでターミナルへ出発、着いた時と同じように気さくなドライバーで、日本に友人がいるので会いたいとも話していた。ブスターミナルへ到着。チェックイン、水ボトル&スナックをもらって発車。

サンミゲル・デ・アジェンデに12時前到着、直ちにタクシーでホテルへ。当ホテルは自炊も出来るような家族向きのホテルで部屋が2つある。フロントで地図と見学地のロケーションを確認してから、出掛けようとする、**You are very lucky, you can see "The Parade of Semana Santa"** (聖週間：キリストの受難・死・復活の栄光を祝う祭の行進) at La Parroquia de San Miguel(サンミゲル教区教会) just now and also evening at San Francisco church.との声あり。この話を聞いて、急いで教区教会へ向かう。

ホテルから、真っすぐ下る道を左折すれば教会だと聞いていたので、左折の道に着くと大勢の人々で大混雑の状況。しかも大通りはロープが張り巡らされている。これは間違いないと確信して、出来るだけ教会の近くに行こうと進み、ようやく教会から50m程度の場所を確保し待機する。時刻は12時50分頃である。ランチどころではない。この教会は全く素人の職人達が宣教師の絵葉書を参考にしながら建てた教会であると云われており、メキシコ産の赤い石材を使用したゴシック調のとて美しい教会である。

セマナ・サントの行列

その内に鐘が鳴り、いよいよ行列が始まるようだ。先ず、先導の天使役の女児2人が教会より歩いて来る。続いて、人が担ぐ神輿に乗った等身大よりはるかに大きい聖母グアダルペ像が、続いて聖火台等のグループが続く、ローマ兵、そして受難のキリスト像が、またローマ兵の一団、花を巻く少女群、十字架を背負う一団、そしてローマ兵に囲まれながらキリスト(実演)が十字架を背負って現れる。その後、ローマ兵に鞭で打たれながら歩く罪人(実演)、再びキリスト像、その後、聖母マリア像が続く、マグダラの顔布を持った聖ヴェロニカ等、約2時間近く続く大パレードである。人々の熱気を間近に感じる一大パレードであり、今日の幸運に思わず感謝、

感謝するのみである。

夕刻のパレードまで時間の余裕があるので急いでランチを取り、歴史博物館を見学しようと訪問するが本日は休館日でがっかり。続いてサンフランシスコ教会、サンフェリペ・ネリ教会を見学し、世界遺産に含まれている郊外のアトニルコ教会を尋ねる。当地行きのバス乗り場が近くのメルカード付近にあると調べておいたので、地元の人に聞きながら辿りつくことが出来た。凡そ14kmの距離だ。尚、余りバスの頻度が多くなく、到着後ドライバーに1時間後の便はどうかと尋ねると、凡その出発時間を教えてくれたので安心して見学することが出来た。決して大きな教会ではないが、一つのチャペルの内部の内壁一面に「ナザレの聖域」と呼ばれる壁画が鮮やかに描かれており、当教会は、ヨーロッパとラテン・アメリカ文化の交流を表す貴重なものとして、サンミゲル・デ・アジェンデとの複合遺産として世界遺産に登録されている。このような地域にどうして、教会が建てられたのか、不思議に思いながら、見学を続けた。

アトニルコの見学を終えてサンミゲルへ戻り、次のパレードを観るためサンフランシスコ教会へ急ぐ。着いた時刻は凡そ午後6時過ぎであったが、もう既に超満員。何とかロープ際を確保することが出来、ひたすら待つことにする。メディアのグループも待機している。

午後7時過ぎパレードが始まる。

先頭に、キリストの磔刑像が喪服を着たグループに担がれて現れる。このパレードは葬送のパレードであることが分かる。次にローマの軍団兵と司令官が、次に真っ白の衣装を着た可愛い少女グループ及び少女達が担ぐ葬祭グッズの神輿、次は真っ黒な喪服を着た婦人の聖像神輿を担ぐグループ(聖母マリア、聖母グアダルペ、聖マグダラのマリア等)が延々と続き、その後には全て男性の喪服グループが2列になって続き、いよいよ横たわるキリスト像が入った透明な棺を担ぐグループ、その後、主催者幹部が従い、次に白い衣装に青いマントを着た少年少女が続き、その後には葬送曲演奏グループ、喪服女性が担ぐ聖女像神輿(聖母マリア、マグダラのマリア、聖ヴェロニカ等)、喪服男性が担ぐ複数の男性像神輿が通り、ようやく長いパレードは終わりに近づく。

パレードも終わり観衆の多くも帰路につき始め、私も興奮を覚えながらガイドブック掲載の近くのレストランに入り夕食を取る。ウエーターも**How are you tonight?**と聞いて来るので、**I am a very lucky man coming from Japan.**と答えると、彼はすかさず**We also excited all day.**と答えて、互いに今日のビッグイベントを喜びあう。夕食が済んで、ホテルへ戻るとフロントに数人の人がたむろしており、彼らは、グアナファトからの観光客で、今日の昼夜のパレードを観て感激したと喜びを私に語る。

フロントスタッフに明日のタクシー手配を午前8時に依頼して部屋に行きテレビをつけてみるが、なかなかニュース番組がなく、ようやく夜の遅いニュースで報じ、翌朝も同様に見ることが出来たが、メキシコでも有数のイベントだと云うことが分かった。

ケレタロ

4月7日(土)：今日は世界遺産ケレタロの街を見学してから、バスでシティ(ノルテ)に一旦戻り、乗り換えてクエルナバカに向かう。ケレタロまで1時間少しで到

着する、短時間の間に見学を終えたいので、到着後、荷物を預けてからタクシーチケットを買い、タクシーで歴史地区にある市内観光バス乗り場に急ぐ。

1時間コースの市内観光を選んで出発したが、ガイドが「ハイ、ここはなにになにです・・・」の繰り返しで、意に沿うものではなく、やはり自分が絶対見学したいところには時間をかけたいと思い、途中下車し、タクシーをチャーターして見学を続けた。あつという間の見学であったが、シティ（ノルテ）行きのバスは13時半発、10分前にバスターミナルへ着き、シティへ向かう。

シティまでは約3時間半要するので、少し休むことにする。予定通り17時にお馴染みのノルテに到着し、直ぐにクエルナバカ行きバス乗り場に行く。今まで遅延や事故等もなく順調な旅を続けており、満足感で一杯。

クエルナバカとテポストラ

クエルナバカ行きバスが17時半出発、約1時間半で到着する予定である。バスは段々と上り始めた、ところどころ立ち往生している車はかなり多く見るようになったので隣の席の人に尋ねると、上り車線で故障車が多く出る坂だと云うこと。頂点に差し掛かり、今度は視界が大きく開き下りとなる。ずっと下りで迫力がある。車の趣味の人には走ってみたいくなるような坂である。

市内に入ると街は坂の街であることが判明。ターミナルにオンタイムで到着、直ちにタクシードライバーにホテルの名前 Hotel Maria Christina と云うと、同じ名前のホテルが2館あり、場所はここだと云うとOKと二つ返事。10分も要さず到着。ホテルも坂を利用したコテージ的リゾートスタイルの作りでなかなか魅力的なホテルで、シティマップの説明もさることながら、特にレストランが素敵。最初レストランマネージャーと思った人はGMで、流暢な英語で Welcome to our hotel, if you have any, please say to us. との挨拶を受け、夕食はホテルのレストランに決定。コンソメスープ（お米入り）、サラダ、鳥カツ（俗称）、後でコーヒーを注文する。

ここでも、マネージャーから、日本の大震災・原発事故のことを詳細に聞かれ、出来るだけ丁寧に答えるように努める。当地で3泊するので、マネージャーに私の海外旅行の原点（特に、徒歩やローカルバスを使用し、地元の人々と話をしながらの行動等）を伝えると Wonderful を連発し、多少は理解してくれたと勝手に納得する。明日は、クエルナバカの見学だ。

4月8日(日)：朝食後、早速、地図に従って徒歩でカテドラルへ向かう。早朝からお祈りの人で一杯で、お祈りの様子を一番後方の席に座って様子を見ていたが、何もしないわけには行かず、見よう見まねで信者の皆さんに従ってお祈りをする。讃美歌もお付き合いをしたが、全てスペイン語のため理解不能。しかしながら不思議なもので、何となく落ち着いた気分になって来るのは、何かの魔法か？ 次のお祈りが始まるまでの合間に、豊臣秀吉によって処刑された宣教師と日本人教徒「日本26聖人」の殉教壁画を、是非とも観たいと思っていたのが実現したので大感激である。結局、滞在中、脳裏に焼き付けるため合計3回観賞する。

次はバスでテポストラへ向かう。直行バスは余りなく、先ず近くのバス停で降り、タクシーまたは別のバスで行き、更に乗合シャトルで行くが、帰りはシャトルと直行バスで帰ることが出来た。クエルナバカから約

23kmの小さな村に、16世紀中期に造られたドミニコ会教会と修道院跡があり、博物館となっている。教会としても機能しているが、内部には赤い文様の壁画等が残っており、また村の歴史的展示物も興味深い。教会では丁度ミサを外の境内で行っており、近づくとも外国人も少数参列しており、誰彼となく私を誘い自然に参列してしまう。この日のミサには、ギターで讃美歌を弾くグループが舞台におり、讃美歌の際には生演奏付で皆が歌う。

世界遺産登録の教会で、しかも大自然の中で且つ先住民の住む鄙びた小村で、このような経験をするとはい予想もしなかったが、これも人生の思い出の1つとなろう。都会ずれしていない素朴な感じが微笑ましい。ランチを取るが、都市の価格の半以下である。

この日、クエルナバカに戻ってコルテス宮殿の見学を終え、ソカロの見学のため向かう。実は、デジカメのメモリーカードが不足するかも知れないと思い、キオスクの人にカメラショップを尋ねると、ソカロの端を指差して、その向かいにあるという。早速、行ってみると、何と我が同胞のご婦人がおいでになり、「今日は」の挨拶から始まり、お年は現在68歳、当地に来て40年、数年前にご主人が亡くなり主人の後を継ぎ、お孫さんにも恵まれ21人とのことであった。丁度、お孫さんの一人の男の子が傍におり、早速、お互いに話をしながら、持っていた全部の黒糖飴数個を差し出すと、「とても懐かしいので直ぐ頂くわ」とお孫さんと共にお口にされるといふ微笑ましい出来事があった。

明日は、約35km離れた「花々の館」と称されるAD700～900年代の遺跡ソチカルコの見学だ。

ソチカルコ遺跡

4月9日(月)：ホテルからバスターミナルまで徒歩10分以内である。早朝、バスターミナルへ行き、係員にソチカルコへ行くチケットを申し出ると、ドライバーに必ず告げるように云われる。坂の街から抜け出して行くような感じで出発し、村々を通り過ぎながら再度高地に上り始めた所でストップし、ドライバーが丁寧に遺跡チケット売り場、遺跡の入口及び帰りのバス停等を教えてくれる。実は、入場券売り場と博物館はバスの進行方向右手の彼方にあり、遺跡の入口と帰りのバス停は左手方向奥と離れているからである。約7～8分でチケット売り場に到着し、係員が先ず当博物館の見学を勧めるので見学すると、かなりの出土品が整然と展示され、見学する価値大だ。

実は、撮影中デジタルカメラ2台の内一台のバッテリーがゼロとなり、予備を持参しておらず焦ったが、直ぐ近くに土産屋があったことを思い出し、係員に断りをいれて行くと、バスから一緒に降りたセニョリータがここで働いているのではないかと、彼女も覚えてくれていたのが嬉しかった。早速、バッテリーを買い求め、見学に戻る。見学にかなりの時間をかけたが、次の遺跡本体の見学も大切であり、切り上げて遺跡に向かう。

来た道を引き返し下車したバス停を越えて行くと、左手に遺跡の入口が現れる。地図をもらって入場し、道なりに真っすぐ行き右折する。広大な広場には相対するピラミッドがあり、右側にはスタンド風の大きな階段が広場を見下ろすように建っている。急な階段を上りその先へ行くと、より上方へ行く道があり、昇り切ると長方形の大きな広場が広がっている。左の方に神殿のような建物

が2棟あり、近づくと石垣にはマヤ族特有の神官が浮き彫り彫刻されているのをはっきり見ることが出来る。しかもその石垣は連続している。このように明確に確認できるのは初めてで、興奮を覚える。メキシコのマヤ遺跡群でも珍しいようだ。

その後は、急坂を下りて球戯場等を見学しようとしたところ、工事関係者からこの先には進めない旨云われ、球戯場での撮影だけと約束して見学を終える。ここの球戯場はオティワカンより古いが、規模は小さい。尚、一説によると、テオティワカンを滅ぼしたのは、ソチカルコの連合群だと云われている。

見学を終えて出口へ向かい、次のバスはどうか尋ねるが、時間は不明だがここで待てば必ず来ると云う。道路の左向かいにレストランがあり、トイレもOKと云うので使わせてもらうが、やはり、ここも極めて清潔である。約30分程度待つとバスが来たのでクエルナバカへ戻る。約50分位だ。クエルナバカのターミナル到着。

多少、時間の余裕があるため、先ず、明日のオアハカへはシティから航空機を利用するが、シティの空港行きバスのチケットを買う必要があり、最初に着いたターミナルとは別のターミナルへタクシーで行き購入。そのまま、時間は余りないが、テオパンソルコ遺跡の見学に出掛ける。係員は、ゆっくり見学しなさいと云ってくれる。見学を終えると、係員はタクシーかバスは先の大通へ行くとあると教えてくれ、その指示通り行き、タクシーを利用してカテドラルまで行き、最後の見学を試みる。かなり日差しが斜めであるが、お祈りの人々の数はかなりのものである。

いよいよ、これでクエルナバカともお別れだと思いながら、最後の夕食を前から目につけていたスープレストランで取ろうと出向き、夕食後、ホテルへ戻る。

オアハカ

4月10日(火):今日はシティから航空機にてオアハカへ行くので、早朝7時発のバスでクエルナバカからシティ空港へ向かう。バスは順調だが、シティに近づくにつれ出勤時間も重なり多少道路は混雑し、到着は予定より多少遅れたがチェックインには十分な時間があり、無事10時45分オアハカに向かう。予定通りオアハカに到着し、タクシーで行こうと探したが、タクシーやバスは無く、乗合タクシーチケットを購入してダウンタウンへ向かう。最も遠い乗客より降ろして行く方式で、私は最後で、宿泊ホテルの前で降りる。

オアハカでは約1カ月前大きな地震があり、ホテルに対し状況はどうかと云う問い合わせをしたことがあり、チェックインの際、私の名前を見てI remember your name. How come? と云うと、You sent E-mail to us concerning earthquake situations before, my name is Mario. と答える。I remember your name also. それからはお互いに話しこむのが当然のように、親しく話しながら、シティマップを広げオアハカでの予定等を確認する。オアハカでは4泊である。チェックイン後、先ず、モンテ・アルバン遺跡行きのバス会社、その他地域へのローカルバスの乗り場を確認するため出掛ける。目的の場所はホテルから徒歩約10分の距離であることを確認し、昼食後早速ローカルバスに乗り、「エルトゥーレ(神木)」の見学に向かい、市内に戻ってからソカロ、市庁舎やカテドラルを訪問して一日を終える。

モンテ・アルバンとクイラパン修道院と夕食

4月11日(水):朝食はホテルのレストランだが、大勢のグループが先に来ており座席の空きが一行の中にしかなく、May I sit? と聞くと Yes, of course. と答えてくれたので、続いてI came from Japan. と云うと We came from Acapulco. と親しく話をしながら食事を取ることが出来た。彼らも今日モンテ・アルバン遺跡に行くと言う。

朝8時発のバスに乗ろうと思い、昨日確認しておいたバス会社に行きチケットを購入。支払いの際セニョリータの云う価格は5ペソ高いではないか。How come expensive? という、何も言わずに正規の価格で購入する。これもメキシコスタイルなのかと思いつつバスを待つが、一向に来ない。流石に20分過ぎたところでクレームを付けた所、何がしかのアクションを取るような動きがあり、代替のマイクロバスが来る。結果的に私1人のチャーターバスとなる。何か悪いような気もするが…。要するに他のお客がいらないだけである。

約30分で遺跡のパーキングへ到着。パーキングは2カ所あり、下の方に着いたが、バス会社により上か下になるらしい。坂を少し上り入口に向かうが、既に多くの見学者が並び、やはり名が知られた遺跡だと思う。券を購入し、係員がMuseoへどうぞと云うので入館すると、決して大きくはないが、見事な出土品が展示され、マヤ人の石の彫刻の凄さに感動を覚える。いよいよ遺跡の見学に向かう。地図を広げながら、東側から、球戯場、宮殿、中央の天文台・大神殿、そして南遺跡を廻り、東遺跡群を見ながら、北遺跡群へ行くルートがベターだと思い行動する。

午前中たつぷりと見学ができ、ここのカフェで軽い昼食を取ることにして、腰を下ろす。昼食後、下方の



バス乗り場に行き、帰りのバスを確認するが見つからない。土産店のおばさんに聞くと、間違いなくここに来るよと云うので待つしかないと思い聞かせて、待つことにする。約30分待つようやくバスが現れる、ドライバーに市内には行かず、次の目的地に行くための降りる地を示し、ここで降りるからと伝えてOKを取る。

次はクイラパン修道院である。ここに行くにはタクシーかローカルバスしかなく、バスで行くことにする。そのバスに乗るため途中下車したが、これが的確でバス停も近くにあり且つバスが直ぐに来た。乗車時間は、多分20分位だ。ドライバーは、とても親切でバス停に着くとこの道を真っすぐ行き右手に修道院があると教えてくれる。徒歩5分程度であるが、近づくと大規模な、ギリシャの大神殿を思わせるクイラパン修道院が見えて来る。正面部分の建物部分はなくなっているが柱列群はそのまま残り、まるでギリシャ神殿の柱列群そのものであり迫力がある。内部は博物館として公開されており、このような建物が鄙びた村の一角にある不思議さの背景はなんなのか? 内部にも一部壁画等が少し残っているが剥落が激しい。見終わって外に行くと土産店があ

り、とても素晴らしい毛織物製品が掛けてあり、色つやも良くしかもサイズが自宅の廊下サイズにピッタリのため、ついつい見てしまう。しかしながら、「山の神」の顔と重量オーバーのことが、頭に浮かび誘惑を断ち切ったが、今でも惜しいことをしたと溜息をついている。当地を後にして、市内へ戻るためバスに乗る。

ホテルに戻り、今日、明日の予定の整理やシャワーを浴びたりして過ごす。夕食の時刻となりホテルのレストランに行く。いかにも、メキシコのおばさんの感じのウェイトレスが **Tonight's Menu** を持って来て、今晚の魚の塩焼きが美味しいと云うので注文する。例のごとく、コンソメスープ、パン、サラダと魚の塩焼きが出て来る。この魚は舌ヒラメだと思うが、夕食後聞いてみよう。何てたって、超美味しい。食後のスイーツにアイスクリームまで出てきて 80 ペソ (約 400 円) の超安。おばさんにあのお魚は何ですかと聞くと **Moho** と書いてくれる。その後 2 回食べることになる。充足感に満ちあふれた状態とはこのようなことを云うのであろうか (編集部注: **moho** は郷土料理の煮込みスープ)。

明日は、一寸遠出のミトラ方面だ。

ミトラ遺跡へ、ヤグール遺跡へ

4 月 12 日(木):朝食の際もアカプルコのグループと一緒にになり、昨日はモンテ・アルバンでは会えなかったね等と話しながら、今日の予定を聞くと、やはりサントドミンゴ教会やオアハカ文化博物館等市内中心の見学だとのこと、私の明日の見学個所である。

ミトラはオアハカの東方 44km にあり、朝食後、早速、出かける。ローカルバス乗り場までは、12 分程度だ。到着日のエルトゥーレへ行く方向で、もう慣れたもの。盛んに乗合タクシーが声をかけて来る、結構安く云って来るがじっと我慢、何故ならドライバーの運転技術が凄く、カーレースの様相で危険極まりない。その内ミトラ行きのバスが来る。ドライバーにミトラ行きを告げて、下車の際の合図をお願いすると快諾。乗車時間は、ほぼ 1 時間半。道路状況は、市内はかなり混雑しているが、エルトゥーレを過ぎてからは快適に走行し始め、道路幅も広く高速道路並みである。ほぼ時間通りミトラへ到着し、ドライバーが遺跡への道を教えてくれる。遺跡への道は、現在工事中で完成すればより分かりやすくなると思うが、遺跡までは徒歩約 15 分の距離である。

ようやく、サンパブロ教会に着き見学。この教会は 1590 年ミトラ遺跡を破壊しその石材を利用して建てられたものであり、ミトラ遺跡のやや北側に位置している。先ず教会の真裏から遺跡見学をスタートする。様々に仕切られた部屋のような石の建造物を見ながら、見学路を南方に行くと遺跡への入場口がある。この辺りは、パーキングや土産品店が道をふさぐように立ち並び、分かりにくくなっているが、教会の南側に当たる。

ミトラと云う名前は、「ミクトラン」(死者の場所) という古代ナワトル語から派生したものと云われ、多くの墳墓が発見されている。ミトラでは生贄の儀式もなされており、17 世紀スペイン人宣教師がサポテコ王等の墳墓を発見したが、数多くの生贄の遺骸が出て来たので再び封印して埋め直したと、その当時の修道僧ゴルゴアが記録を残している。それでも、サポテコ人が残した幾何学模様の装飾、建築技術や彼らの高い才能には敬服する。

次は、ミステコ人及びサポテコ人によって造られたと云

われているヤグール遺跡に向かうため、バス乗り場へ急ぐ。バス乗り場に行くと、多くの人がバス待ちをしている。乗合タクシーも一杯で、なかなか交通手段が見つからない。その内バスが来たので競いあいをして何とか乗りこむ。ドライバーに例のごとく云うと OK。ミトラから 10 km ほどオアハカ寄りである。その内ヤグールに着き、ドライバーはあの右手の道を真っすぐに行けばいいと云う。バス停より、遺跡まで約 2km はあると思う。ガイドブックは 1.5km となっているが、徐々に上り坂で通る人や行き交う車は一切なく、何となく気持ちが悪いが行きたい気持ちの方が勝って歩き、ようやく到着し約 30 分を要した。入場券カウンターに行くと、とても親切なおばさんがいて、**Welcome!** とにこにこ笑いながら声を掛けてくれた。私は **Gracias** と声を返しながら遺跡見学に向かう。

ヤグール遺跡の見学を終え、戻ろうとすると凡そ 10 人前後の見学者が来ており、その中に夫妻と子供(男児)がいる。入口でトイレに行ったり、水や菓子を飲食しながら、ゆっくりと休息を取っている所へ、そのご夫妻が戻って来る。互いに軽く会釈をしながら夫妻は、隣のパーキングへ行きバンに乗る準備をし始める。私は、思わず駆け寄り **Would you please bring to bus station?** と声をかけると、**Ok sure, please on.** と夫妻が同時に云ってくれる。まあ古い言葉で云えば天の助けである。早速、乗り込み、短時間であったが会話もはずみ、夫妻一行はこの先ミトラへ行くとのこと、私はオアハカ市内方面へと告げる。彼らはアメリカ人でシアトルからの観光客だが、車ではるばる来たとのことであった。私は 1969 年シアトル近郊エヴァレットにあるボーイング社のジャンボジェット組み立て工場を見学したこと等も話し、互いの旅の平穏を祈る言葉を交わしながら別れを告げる。無論あるだけのお菓子や飴類を男児に渡したことは云うまでもない。これこそ、旅の醍醐味、これだから、旅は楽しいのだ!!!

サアチーラのティアンギスとメルカードと遺跡

バス停でバスを待つまでもなく直ぐに来る。遅めのランチだが、多少お菓子類を食しているので、既に見学済みのクイラパン修道院方面のサアチーラ村へ行くことにする。今日木曜日は、当地でティアンギス(青空市)が開催されていることとサアチーラ遺跡を見てみよう。昨日と同様、地図を見せながらドライバーにそこへ行くのに便利なバス停での降車を依頼する。小 1 時間で市内へ到着し下車。川がありその橋を渡って、昨日と同じバス停に着く。もうオアハカ市民と同じような気分でバスを待っていると、このバスも直ぐに来るではないか。本日の強運は未だ健在なようだ。凡そ 20 分強で到着。

降車ターミナルの目の前がティアンギス会場である。その傍に大きな建物があり、多分メルカド(市場)であろうと検討をつけて行くとピッタリ。早速、食事が出来るカウンターカフェに座り、飲み物とサンドイッチを注文すると、当初、いきなり変な外人が来たような感じで周りの人が見ていたが、それも食事中と食事後の地図を見ての会話等から一切そのような雰囲気はかき消すように無くなる。女主人のおばさんと若いセニョリータと一緒にあって、教会と遺跡の位置を丁寧に教えてくれる。**Gracias** と云って、先ず、ティアンギス会場を歩いて見学。野菜、果物、日用品、衣料品等、もう会場はお店な

のか人ごみなのか判別できないような状況である。しかも、そこにいる人々は、伝統的な先住民の衣装を着て集まっており華やかな雰囲気になり、ガイドブックによると、このティアングスの開催日は曜日・都市毎に決められており、月曜日はお休みである。その雑踏の中を抜け出して、少しだけ高台にある教会を尋ねると、門は閉まって入れない。午後2時～4時の間はお休みのため、遺跡の方に向かう。

サアチーラ遺跡は当時の繁栄ぶりを示す王族の墳墓で、ここから数多くの副葬品が発見され、その出土品の多くはオアハカ文化博物館とシティの国立人類学博物館に展示されている。従って、ここでは円墳のような形状の墳墓と副葬品が出土した墳墓の内部を見学するだけであるが、内部は如何にも王族の墳墓らしい様相を示している。遺跡の見学も終え、ティアングス会場に戻りながら教会見学は諦め、ブスターミナルへ行くと発車寸前で急ぎ乗り込む。今度は途中下車なしの市内バス停で降りることになる。ただ、その場所が多少不安だったが、乗る時に前後左右の景色を覚えておいたので無事バス停で降りることが出来た。

ホテルに帰る途中、ホテル真裏に当たる場所にラ・ソレダー教会があるので立ち寄る。正面の広場より1段高い広場があり、そこでは学生を中心に若者たちがダンスの練習をしており、ダンス広場とも云われている。今日の行動予定は100%以上の成果があったことを再確認して、ホテルに戻る。明日は、いよいよオアハカ滞在の最後の日で、市内が中心であるが、未だ訪問していない、サントドミンゴ教会、オアハカ文化博物館、市庁舎やルフィーノ・タマヨ博物館等を中心に見学する予定だ。

オアハカ市内の散策

4月13日(金)：昨日は強運な1日であったが、今日は暦の上で13日の金曜日である。何事もスムーズであることを願いながら、朝食会場に向かう。例のごとくアカプルコの一行が早い朝食を取っている。How are you today? と声をかけると、We come back to Acapulco today. と云うではないか。もう一度メキシコに来てアカプルコにも是非尋ねて欲しいと云われ、If I have a chance to go, I will do. と答えるしかなかった。互いの健康と旅の無事を願って別れを告げる。さあ、オアハカ最後の日だ。何の疲労感もないのは不思議なくらいだ。多分、万歩計を持参していたら、毎日2万歩に達するほど歩いていると自分では確信しているが、多少誇張であっても相当に歩いていることは事実である。

先ず、近くの早朝のラ・ソレダー教会を撮影してから、家に電話を入ると家内と話すことが出来た。今回のメキシコ旅行はとても充実している旨を話して電話機を置く。真つすぐサントドミンゴ教会とオアハカ文化博物館に向かう。この後、ソカロに向かい再度カテドラルを見て市庁舎に向かう。メキシコ独立に伴い、ベニート・ファレス大統領はメキシコ歴史上初めて先住民出身の大統領となる。彼はオアハカ近郊のサポテコ人で、功績を称える大きな壁画が描かれ、見学することが出来る。

ここで遅めの昼食を取ることにする。昼食後、プスケットを買うため近くのチケットオフィスに行き、オアハカ/プエブラ間及びプエブラ/ベラクルス間のチケットを予定通りの時間帯で購入。出来れば行きたいと思っているカラクルム遺跡(世)に関する情報を得たいの

で、インフォメーションセンターと旅行社の所在を尋ねて質問するが、彼らは思うほどの資料や知識を持っておらず空振りである。

次いで、本日最後の見学個所であるルフィーノ・タマヨ博物館に向かう。ソカロから僅か5～6分程度に位置している。ルフィーノ・タマヨ(1899～1991年)は有名な壁画家であるが、ここは彼の作品美術館ではなく、オアハカ近郊に栄えたサポテコ人/ミステコ人遺跡からの収集品、ベラクルス州のトトナカ/オルメカの出土品やテオティワカン文明時の出土品等、彼のコレクションの数々が展示されている。コレクションの中でも、人面像や土偶像等が数多く展示され、興味深く必見である。これでオアハカの見学個所をほぼ網羅した。ホテルに戻り明日からのプエブラ行き準備を行う。13日の金曜日であったが、その兆候は一切なかったのが幸いである。

プエブラ：チョルーラ遺跡

4月14日(土)：早朝7時のバスのため、前の晩にホテルのマリオさんに6時のタクシーと飲み物、菓子パンやバナナ1本等を依頼したが、フロントに約束通り用意してあるのが嬉しい。ブスターミナルまで10分少しで到着。待ち時間の間に、少し腹ごしらえのためホテルが用意したスナックを食しながらバスの出発を待つ。予定通り出発し、プエブラまでは約4時間半の予定だ。バスは山野を快適に走行し、両側に大きなサボテンが立っている光景を眺めたり、目を閉じたりしながらバスの中を過ごし、定刻通りプエブラのブスターミナルへ到着。早速、荷物をターミナルに預け、そのままチョルーラ遺跡(世)方面に出掛けるためローカルブスターミナルへ行くと、バスは直ぐに見つかり出発、所用時間は30分強だ。

チョルーラ遺跡に到着後、昼食は近くのカフェに入りファーストフードで済ませるが、何といたってもビッグサイズで半分を平らげるのに一苦労だ。食後、お店のセニョリータに遺跡の場所を尋ねて向かう。カフェ真向かいの大きな小山が遺跡本体のピラミデで、右側に回り込むと入口がある。廻り込む道には数多くの屋台店が立ち並び、門前市の様相を呈している。だんだん小山のようなピラミデの様子が分かり、その規模の壮さに息を飲む。

このピラミデの正式名はトラチウアルテペトル大神殿で、大神殿も付随する建物も破壊され廃墟となったが、多少往時の姿を垣間見ることが出来る。現在、頂上の大神殿跡にはロス・レメディオス教会が造られ、巡礼者等お祈りに訪れる人々で賑わっており、見学の際には結婚式が行われていた。

プエブラ：サンフランシスコ会修道院

まだ多少時間の余裕があるので、ウエホツインゴのフランシスコ会修道院(世)の見学に向かうことにする。

バスの乗り場等はカフェで聞き、徒歩約10分にあるバス停に向かう。チョルーラから14kmに位置し30分も要しないで到着する。オアハカでクイラパン修道院を見学したが、それに勝るほどの修道院で、特にカトリック布教壁画が比較的に残っているのが嬉しい。現在は布教博物館として機能しており、世界遺産のポポカテペトル山腹の修道院の1つとして登録されている。修道院へのアプローチの庭も手入れが行き届いており美しい。

なお、ウエホツインゴをバスで往復中、盛んに煙を上げる活火山を遠望することが出来た。その火山は、ポポ

カテペトル山 (5452m) で、4月19日大噴火したとの記事をメキシコでも見かけた。

プエブラ：教会コンサート

見学を終え、少し街の見学もと一瞬思うが、時間も経過しておりプエブラ市内へ戻ることにし、バスでプエブラのブスターミナルへ戻り、荷物をピックアップしてタクシーでホテルに向かう。ドライバーはとても紳士的で、何の問題もなくホテルに到着。例のごとくシティマップをもらい、市内の主要な見学箇所を確認して部屋に入る。ホテルはアラビックなホテルで、多少違和感があるが、天井も高く、何と云ってもロケーションが最高。カテドラルを含む市内見学は全て徒歩で行けるのが嬉しい。

早速、夕食を兼ねて、午後7時頃カテドラルに向かう。カテドラルでは丁度コンサートの最中で、係員のセニョリタに *May I see this concert & how much?* と云うと、意外にも微笑みながら *Free charge, sir.* という返事でプログラムも渡してくれる。何時ものように *Gracias* と云って近くの空き席に座り、最後まで聴き入る。終了したのは8時を少し廻っていたが、教会コンサートは何年か前のワルシャワ、プラハ、ウィーン以来で、カトリック世界の共通イベントも楽しい思い出となる。その後、夕食を取りホテルに戻り明日の予定を立てて就寝する。明日は郊外のカカシュトラへ先に行き、その後、市内の主な見学地を廻る予定だ。

プエブラ：カカシュトラのミサと青の壁画

4月15日(日)：早朝、ホテルからカテドラルを過ぎ、大通りのローカルバスでプエブラのブスターミナルへ行く。この際もドライバーは近くで降りて歩いて直ぐだと云うので乗り、乗客の1人が自分もターミナルへ行くので声をかけてくれる。ターミナルでカカシュトラ行きのバスを探すと、簡単に見つかり乗車する。早朝でもあり、道路の混雑もなく約30分で着く。しかしながら、遺跡は降車した場所から徒歩約15分位を要するが、まだ朝の8時を過ぎたところで9時の入場時間まで時間が過ぎる。そこで、どうしたものかと探すと、約100mほど先に教会があり日曜ミサを行っているので、入口で日本からの観光客である旨話して参列する。お祈りの人々は皆、当教会付近の方々のように、相当数の子供達や若者もお祈りに参列している。ミサの合間の神父さんの言葉、讃美歌、起立、着席を繰り返しながら、ミサの終わりには見ず知らずの人々が互いに握手やハグをしながら、一区切りとなる。これで4回目のミサへの参列である(モレーリア、クエルナバカ、テポストラン)。

教会を後に遺跡へ向かうが段々と登り坂が厳しくなり始める。坂の途中から左手に遺跡が見えるのでホッと一息。ようやく約20分で入場券カウンターに辿り着く。9時になり急ぎ遺跡へ向かうが、平坦と云うより少し下り坂となり、未だ10分程度歩く必要がある。ようやく遺跡入口に到着すると、そこは平坦地に築かれた大きな台座のような感じを受ける遺跡で、しかもその台座は巨大な人工ドームで全て被われている。辺の長さは全くの素人判断だが少なくとも100m x 200mはあると思う。尚、このドームはJICAの協力で作られたとのこと。

カカシュトラ遺跡はプエブラの北西約35kmに位置し、紀元600~900年頃のオルメカ文明を継承する遺跡である。この遺跡の特長は青を基調とした古代壁画が極

めて良い状態で残っていることで、マヤ、アステカの絵画を比較研究する際には、カカシュトラ遺跡抜きには考えられないと云われるほど重要な遺跡である。貴重な壁画は中央広場に面して、ガラスケースに収められている。マヤブルーと云われる青を基調とした戦闘場面(ジャガー戦士と鷲の戦士との戦い、昼と夜との戦い等)の壁画はとても素晴らしい。何回も往復して観賞すると同時にシャッターを切る。出来ることならまた来たいと思うと共に勧めたい遺跡である。

プエブラ市内散策

興奮さめやらずの気持ちを静めながら、プエブラ市内へ戻ることしバス停へ急ぐ。到着したバス停よりも少し先にある幹線道路のバス停は頻度が多いと教えられ、急ぎ向かうと案の定直ぐにバスが来る。これで一安心。後は、市内の主要ポイントを如何に有効に廻るかを考えるのみである。乗客の1人にこのバスの行き先は市内の何処か聞くと、ブスターミナルではなく市内のソカロ方面に行くに云うのではないかと云うことなし。ソカロで下車すればホテル、カテドラルも近く且つ次の見学地に全て徒歩で行ける。もう最高と喜びを押さえるのに懸命な中、思わず *Gracias* を連発。バス下車後、一旦ホテルへ戻り少し整理を行ってから、再び見学に出掛ける。先ずカテドラルへ向かう。

カテドラルは先日、教会コンサートが行われていたのを観賞したが、夕暮れになるとパイプオルガンの演奏が行われると聞き、夕刻時、再度来訪してオルガン演奏をうっとり観賞する。ソカロは昼夜を問わず、人の流れは途切れることなく、プエブラはそれほど魅力的な街なのかと自問してみる。ともかく大勢の人々が集まっている街である。次は歩行者天国の沿道にある、サントドミンゴ教会へ向かう。当教会は柱、壁画や聖壇に至るまで金箔に被われているが、豪華絢爛の中にも荘厳さを持ち合わせており、観賞しても飽きないのは何故であろうか。次は、直ぐ隣りのホセ・ルイス・ベージョとセティーナ博物館に向かう。次に、これも遺跡への門を思わせる門をくぐってヴィクトリア・ショッピングセンターへ行って見る。カフェでアイスクリームを食べてしばし休憩。今歩いている通りはMayo通りと云って、プエブラ第一のショッピング街であり、大勢の人がショッピング、カフェやレストランでの食事等を楽しんでいる。

次はサンタモニカ宗教美術館に向かう。宗教美術館としては、ドイツ・ケルンにあるヴァルラーフ・リヒャルト博物館、ベルギー・ブリュッセルにある王立美術館とスペイン・バルセロナのカタルーニャ美術館が有名である。私は多少期待を持って見学するが、元来修道院であり、修道女の日常生活等と共に宗教画が掲示されている。当修道院は、国の政策により、過去半世紀以上に亘って表だって信仰普及を続ける状況になく、秘密裏に宗教生活を送る時期があり、その秘密の仕掛けが随所にあると云う不思議な空間を持った建物である。中庭も綺麗に手入れされ、何となく安らぎを覚える感じがし、見学することに抵抗感がないのが不思議と云えば不思議である。

プエブラは市内よりも郊外に素晴らしい遺跡を有する街であることが分かる。いよいよ明日は、午前8時半発のバスでベラクルスへ出発だ。

<以下次号掲載>